富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 №3：93－101

不登校経験者の自己省察に関する研究（３）

―時間的展望の変化に着目して―

松井　理納*・稲垣　応顕**

Investigation on Self-reflection of Those Who Experienced School Non-attendance (School Refusal) 3

―Focusing on the Change in Time Perspective―

Yoshino MATSUI and Masaaki INAGAKI

キーワード：不登校経験者，自己省察，質的研究，時間的展望
Keywords：experienced school non-attendance（school refusal），self-reflection，qualitative investigation，time perspective

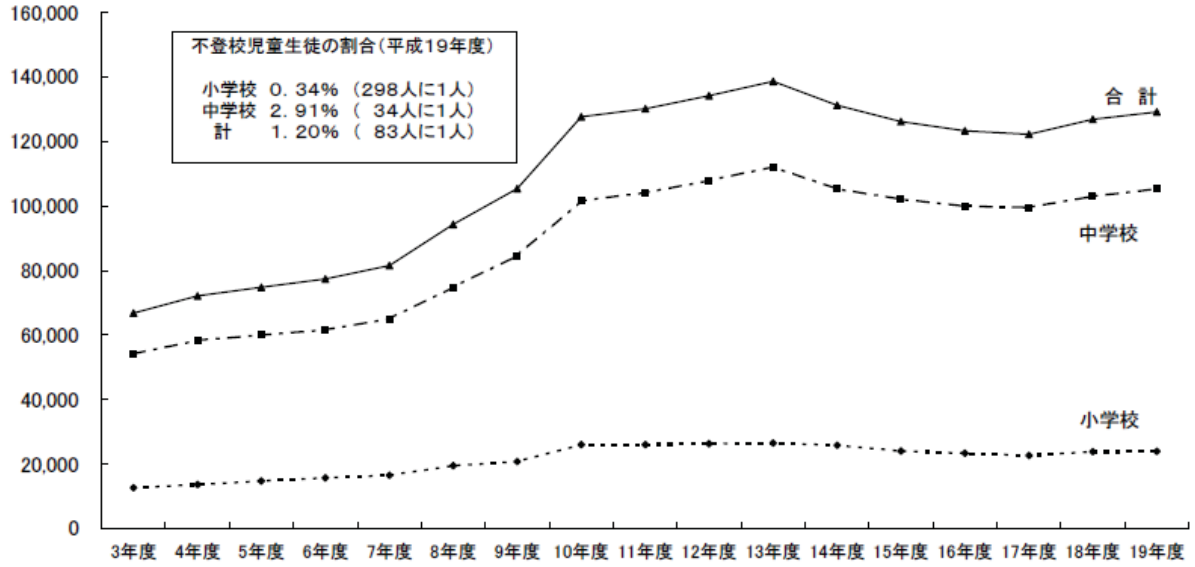
１．はじめに

不登校（＝School Refusal：以下，SR と略記）問題は，今日の学校教育現場において依然として大きな課題である。文部科学省（以下，文科省と略記　2008）の報告によれば，ＳＲ生徒数は2001年度から2006年度までの5年間において減少している。しかし，最新の数値である2007年度の国公私立小・中学校におけるＳＲ生徒数は，129,254人（前年度比1.9%増）と報告され2年連続して増加している（表１）。

なお，この報告に対して明里（2007）は，文科省の不登校調査がＳＲ児童・生徒の実数のみで行われており，少子化による母集団の減少が考慮されていないと指摘した上で，「ＳＲ児童・生徒は調査開始以来，一度も減少していない」と述べている。また相馬（2006, 2007）も，文科省(2006，2007)によるＳＲ児童・生徒数における報告のうち，1991年度から2004年度のデータを再検討し，①その比較で実数が約２倍，出現率が約2.6倍と増加していること，②文科省が減少傾向と報告した４年間についても出現率ではほとんど差が見られないこと，を指摘している。

一方，文科省（2008）は，ＳＲのきっかけは「本人の

表１「不登校児童・生徒数の推移」



* 富山県立保育専門学院
** 上越教育大学（９月まで富山大学人間発達科学部）

問題（38.8%）」が最も多く，全体の1／3を占めていると報告している。しかし森田（2001）は，ＳＲのきっかけとして最も多かったのは「友人関係（50.4%：いじめ，けんか 等)」であり，次いで,「学業不振（31.1%)」,「教師との関係（23.5%)」の順であったと報告している。筆者らは，両者の実態把握の違い，換言すればＳＲ児童・生徒の理解についての違いが，学校や家庭における彼らへの対応の違いにあらわれると考えている。また筆者らは，文科省の調査に本基本データの提供者が，誰なのかが問われなければならないも考えている。すなわち,“誰の視点”から捉えたＳＲなのかということであろう。

ところで，ＳＲ経験を有する者に①ＳＲ当時の状況，②ＳＲ当時の心境，③ＳＲ当時の援助体制，④その後の進路状況，などを追跡調査した研究の乏しさが指摘されている（星野ら，2003；森田，2003 et al)。筆者らは，この指摘がＳＲサポートを実践する上で，極めて重要だと考えている。何故ならば，ＳＲの最中にいる児童・生徒は，いわばその波に飲み込まれた状態であり，冷静に自分を見つめサポートを求めることが難しい（稲垣，1996)。したがって，ＳＲの経験者に過去への振り返りを促し，前述の①から④について，どのように感じているのかを調査することが，現在ＳＲの状態にある児童生徒の心理状態を把握し，何が効果的なサポートとして機能するのかを検討するのに有効だと考える。

これについて，わずかに認められる研究として森田（2003）は，中学校３年生次に年間30日以上欠席したＳＲ生徒を対象とした「不登校に関する実態調査（平成５年度不登校生徒追跡調査)」を報告している。そこでは，ＳＲ経験が現在の状態に与える影響について，その経験が「マイナスではなかった」と感じている者の特徴として，①ＳＲが継続した理由として，学校に行く意義を認めず自らが選択してＳＲであったこと,②ＳＲ継続中の，心理的負担がなかったと感じていたこと，③出会いや経験に恵まれ,「信頼できる人」との出会いがあったこと，④ＳＲの経験が，今日の苦労や不利益につながっていると感じたことがなかったこと，などの結果がまとめられている。また，松井・稲垣（2007）はＳＲ経験者である成人を対象とした調査から，彼らがＳＲ当時にサポートと感じていたのは,「サポートの担い手から何をしてもらったかということより，損得勘定または裏表なしに自分と一緒にいてくれた“存在”であった」ことを報告している。

筆者らは，ＳＲ児童・生徒への有効なサポートの手立てを打ち立てるためにも，さらに多くのＳＲ経験者を個別かつ質的に追跡調査することが必要であると考えている。

２．目　的

ＳＲ経験者へのインタビューにより，主観的内容としての①ＳＲを有していた時期の心理的状況，②現在の心理的状況，について質的に検討を行う。またそれを踏まえて，③今後のＳＲ問題における有効な支援方法に示唆を得ることを目的とする。

３．方　法

(1) 対　象

ＳＲ経験者であり，現在は二児の母親であるUさん。プロフィールを表２で示した。なお，プロフィールにおいて掲載した家族構成は，不登校当初と現在の２通りである。

(2) 期　間

2008年７月

(3) 場　所

Ｔ大学の個別面談室

(4) 方　法

Ｕさんに，ＳＲ状態であった当時を回想し，以下のアンケートに回答するよう促した。また，その結果を踏まえて面談によるインタビューを行った。

(5) アンケートの内容

Ｕさんの過去・現在・未来に対する時間的展望を踏まえた心理的状況を把握する目的で，以下のアンケートへの回答を依頼した。

①**「私の人生曲線」**：Ｕさんが，自身の人生をどのように見つめているのか，未来に対してどのような時間的展望を有しているのかを把握することをねらい，稲垣・松井(2007b)，松井・稲垣（2008）に依拠した「私の人生曲線」を描くよう促した。その内容は，過去から未来までの自分の人生を，そのライフイベントと共に図示化するというものであった。

②**「心のコラージュ」**：現時点におけるＵさんの心理的状況を把握することをねらい，投影法の手法であるコラージュの作成を促した。自分の気持ちにフィットする写真をＢ4の台紙に貼り，１枚の作品を作成するよう促した。

なお，本来のコラージュ療法では，クライアントに雑誌の切り貼りを促す。しかし今回は，時間短縮を目的に，筆者らが貼り出す写真を事前に切り抜き用意した（40枚)。その題材は，コラージュで一般的に良く用いられる「風景」,「人物」,「動植物」,「家や家具」,「食べ物」とした。

③**「私へのお手紙」**：過去への時間的展望の状況と，過去に対する受容の状況を把握することをねらい，“今，ここで”の自分から不登校当時の自分に宛てた手紙（メッセージ）を書くよう促した。

④**「子ども達へのお手紙」**：結婚し２児の母となってい

表２　Ｕさんのプロフィール

・氏名，年齢，職業：
　　Ｕさん（女性），２７歳，介護職（パート）
・家族構成（SR 当初）：
　　曾祖父，曾祖母，祖父，祖母，父，母，兄，Ｕさん
・家族構成（現在）：
　　夫，Ｕさん，長女（Ａ），長男（Ｓ）
・不登校の期間：
　　小学校２年生～中学校３年生
・不登校の経緯：
　　家庭内不和に加え，兄へのいじめがＵさんに飛び火する。同時期に，肺炎を患い欠席状態となる。病気が完治した後も，継続して不登校の状態となった。小学校５年生まで，自宅に引きこもりその後，適応指導教室へ通級する。
・その後の経緯：
　　県内の単位制高校に入学すると同時に，不登校から脱する。その後，私立短大（福祉系）に入学するが，妊娠・結婚を機に退学し，専業主婦となる。長女を出産後，介護職の資格を取得し，現在に至る。なお，現在も上級の資格取得を目指し勉強を続けている。

＊以上は，１回目の面談の際，Ｕさんから語られた内容による。

るUさんに，現在と未来に対する時間的展望の状況と共に，他者への意識（受容）の度合を把握することをねらい，子ども達へ手紙を書くよう促した。

⑹　手続き

筆者らは，Ｕさんと事前にアポイントメントを取り，直接面談を行った。面談の内容は，以下の手順に沿って，アンケートとインタビュー調査を実施した。原則として週１回，１回あたり60～90分，全３回で実施した。

【面談１】
１）相互に自己紹介を行う。
２）研究の趣旨を伝えた上で，「人生曲線」と「私へのお手紙」について書く用紙を手渡し，１週間後に回答するよう依頼した。

【面談２】
１）1週間後に行われた面談において，【面談１】の２）で示した「人生曲線」と「私へのお手紙」を回収した。その際，筆者らも自身の「人生曲線」を作成の上持参しシェアリングすることで，Ｕさんの自己開示を促した。また，Ｕさんの「人生曲線」を踏まえたインタビューを行った。
２）「心のコラージュ」を作成するよう促した。さらに，筆者らも同様にコラージュを作成し，お互いの作品を通したシェアリングを行うと共にインタビューを行った。
３）終了時に来週の面談までに「子ども達へのお手紙」を書くよう依頼した。

【面談３】
１）前回依頼した「子ども達へのお手紙」を回収した。また，過去の自分および，子ども達に当てた手紙の内容を踏まえたシェアリングと，3回の面談の感想を含んだインタビューを行った。

３．結果と考察

本稿では，経験者Ｕさんの回答を「方法」で示した①～④の順にまとめて記していく。また，順次考察を加えていく。

本稿では，それぞれの結果を示しながら，インタビューにより答えられた内容を一緒に記述していく。

①　「私の人生曲線」について

Ｕさんの「人生曲線」を図１で示した。それによれば，Ｕさんの誕生から５歳までの人生曲線は，緩やかに下降していたが，５歳から急激に落ち込んだ線を描いた（－６）。この時期は，母親が家出している状態であった。８歳時に母親が家に戻ると，曲線は基準線近くまで上昇する（－１）。しかし，すぐに再び落ち込み15歳まで続く（－４）。この時期についてＵさんは，ＳＲ状態であったことを「不完全燃焼の日々」と記述している。16歳でわずかに好転するが（＋1），(－)と(＋)の領域を行き来している。18歳から(＋)に上昇し，21歳で１つの頂点を迎える（＋８）。この時期のライフイベントとして，Ｕさんは妊娠・結婚・短大中退をしている。翌22歳の時に＋３まで下降するが，その後再び上昇し，今後も上昇していくことをイメージしている。

Ｕさんは，幼少期を振り返り「曽祖父が亡くなり，母と祖父の仲を仲介する存在がなくなった」と述べ，それがきっかけで母親が家を出たことを語った。Ｕさんは，その当時について「入園式の（母親が一緒に写っていない＝筆者が追記）写真を見ると，本当に寂しそうな顔をしているな，と思う。寂しかった」と述べている。その後Ｕさんが８歳の時，母親が家に戻ることになる。その

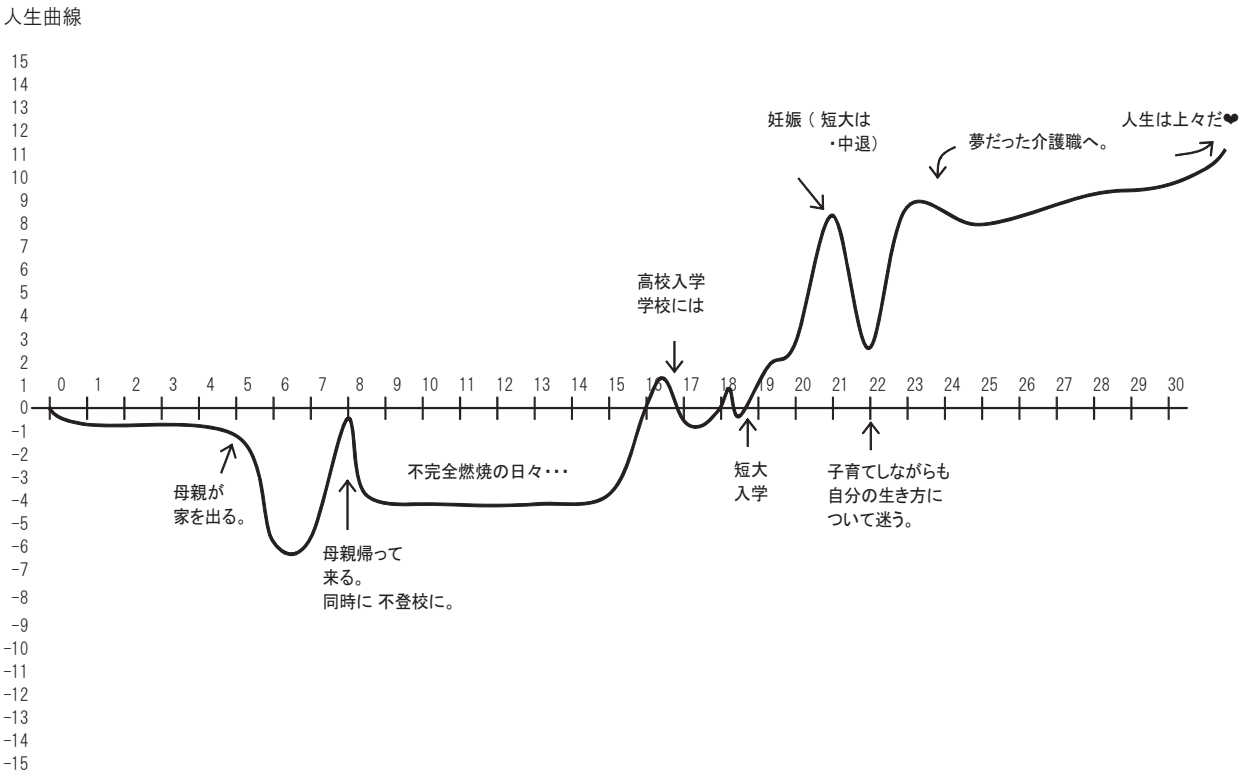


図１　Ｕさんの人生曲線

際，母親は父親（＝夫）に義父母との別居を強く申し入れ，それは実行された。このことにより，Uさんの心の安定が図られたと推察される。母親が家を出ていた際に急激に落ち込んだ人生曲線は，マイナス領域ではあるが母親の家出前の水準まで戻っている。

ところが，母親が帰ってきた時期にUさんはＳＲの状態となった。このことについてUさんは，「学校へ行かなくなったのは，１つの理由ではない」と述べた上で，兄の不登校，そのことでのＵさんへの中傷，祖父母への反発，などを語った。さらにUさんは，その中傷を振り返り「兄の不登校をなじられた。＜中略＞陰湿ないじめもあった。信じていた友達に，ランドセルを捨てられたりして・・・少しずつ友達が離れていった」と涙ぐんだ。さらにＵさんは，肺炎を患い学校を休んだことを契機に「学校へ行きたくない気持ち」を強くした。そして彼女は，「兄も（学校へ＝筆者ら補足）行かないので，自分も辛いしやめようかなと思った」と語った。

また，ＳＲになった頃の家庭の状況について，祖父母の「学校へ行かないことでの風当たり，両親が自分をつれて別居したことでの八つ当たり」に気を病んでいたようである。しかし，その一方で両親については，「母は，（自分と＝筆者ら補足）気持ちの距離が近かった」，「父が最初いろいろ言っていたことについても，母は私と兄をかばい，理解するように働きかけてくれた」，「それに，母は学校にも何回も行ってくれて，いろいろ先生たちと相談してくれていた」などとも述べた。一方，父親については「学校に行かなくなった頃は，すごく怖かった。でも，最終的には私の状態を受け入れてくれて，見守ってくれていたと思う」と述べた。筆者らは，Uさんにとって母親が，カウンセリングで用いられる表現をすれば“支持”の態度を示し，「ありのままの自分を受け止めて，支えてくれる存在」であり，心理面で第１のサポーターであったことを感じている。これは，彼女が述べた「母が近くにいて，話を聴いてくれる。味方でいてくれる。支えになっていた」からも窺われる。

次に，周囲の仲間については「仲良かった友達に対しても，壁を感じるようになった。自分から壁を作っていたのかもしれないけど・・・」と述べた。また，当時（小学校）の同級生に対して，「私は，みんながやっていることをやってきていない。年は一緒だけれど，みんなよりずっと劣った存在だと思っていた。やってないことがいっぱいあったから・・・，勉強とか，人とのコミュニケーションとか・・・」と述べ，劣等感を抱いていたことを窺がわせた。さらに，「苦しかったことは，周囲から取り残され，孤立していくことを感じていたこと」であったとも語った。一方，小学校高学年から通級していた県立の適応指導教室での仲間について「境遇も同じこともあって，本当に楽しかった。＜中略＞学校へ行っていないことが普通だった。そこでは，自分は特別な存在ではなかった。学校とかに行っていたら，たくさんいる中でこの子はちょっと違うんだという視線を感じていたが，そこ（＝適応指導教室）に行ったら，自分の居場

所があるなと感じた」,「・・・ただ,“自分がこれからどうなるのかなあ”，とか何となくの不安はあって，ふとした瞬間に自分に戻って，何か不完全燃焼みたいなものも感じていたかも」と述べている。Uさんは，適応指導教室を自分の居場所と感じ，ＳＲを有する仲間と会えることを楽しみにしていたことが明らかとなった。松井・稲垣（2006a,b）は「不登校経験者にとって，当時の適応指導教室などでの仲間からの関わりをサポートとして捉えていなかったのではないか」と述べている。しかしUさんの発言は，ＳＲを有する生徒も，周囲と関わりたいという気持ちは充分に有している（星野・熊代，1990）という指摘を支持している。また，適応指導教室に通う児童・生徒同士が無意識のうちに一種の“Peer Support（ピア・サポート＝仲間同士の支えあい)”の機能を果たしていることが推察された。ただし，そのような中にあってUさんは，将来への時間的展望において不安をもち,先が見えないことでの「不完全燃焼」の気分を感じていたようでもあった。

その後Uさんは，単位制高校への入学を機に不登校から脱する。彼女は,不登校当時と高校入学後を振り返り,「人間関係がリセットされた」ことと同時に,「不登校の時は何かやりたい，ずっと家にいるんじゃなくて自己実現をしたいなとずっと思っていたと思う。高校に入ってからは，その時が来たと思って,（中略）周囲とトラブルがあっても，ちょっと学校が嫌かもと思っても，何か一人ぼっちだったあの頃には，もう戻りたくない。・・・ということが逆に支えになったところもあった」と語った。この発言から，高校生当時のUさんにおける自己実現とは,“クラスメイトと普通に話すこと”,“普通に授業を受けること”であったことが明らかとなった。加えて，当時参加していたボランティア活動を通して，卒業後の進路を考え始めたことが，Uさんの気持ちを前向きにさせ劣等感を克服することにつながったと思われる。Uさんは，高校時代を総括して「友人関係とかで悩んではいたが，普通の青春の１ページ」とわずかに微笑みながら発言している。

さらにUさんは，高校卒業後の進路として介護の仕事を自ら選び短大に進学する。その頃，現在は夫となっている男性と出会い，妊娠・結婚を機に短大を中退する。Uさんは「学校は，やめてしまったけれど，後悔はしていない。これまで一度も（子どもを＝筆者ら補足）生まなきゃ良かったと思ったことはない」と述べている。

ところで，人生曲線は22歳のあたりで大きく下降している。このことについてUさんは,「子育てしながらも自分の生き方について迷う」時期であり，それ以降の上昇は,「夢だった介護職へ。忙しいけれど楽しかった」と語っている。Uさんは出産後，短大の仲間が夢をかなえて働いている姿を見て「ずっと社会人として，大人として，取り残されていく」と，不登校当時に似た疎外感を感じていたようである。しかしUさんは，現在の家族と義母の協力を得ながら介護職の資格を取得する。また，現在は老人介護施設において,パートとして働いている。そして，さらに上級資格取得を目指している。

Uさんは，他者との関わりおいて「同年代の人と，グループでも１対１でも，黙ってしまうから自分のことを話したり，コミュニケーションをとったりするのが苦手なんだけれど，旦那は，どんどん自分のことをオープンに話してくれるから，話し相手の自分も，こんなに自分（＝夫）のことを話してくれるんだなぁ，うれしいなという気持ちになって，自分もちょっとオープンにしてみようかなと思うようになった。それを繰り返していったかな」と述べている。筆者らは,上述のコミュニケーションによる感情交流がUさんに結婚を決意させたと感じている。また，自分を支えてくれる夫がいるということを確信したことが，介護の資格取得への原動力となったのではないかと推察している。

②「心のコラージュ」について

Uさんにより作成されたコラージュを図２で示した。そこでは，中央に緑の木が置かれ，左側に家族団欒，鉢植えの花を配されている。また，下方にはたくさんのおかずが詰められたお弁当箱，穏やかに笑う老夫婦の写真が貼り出されている。一方，右および右上には，青空にそびえる山と飛行船が置かれている。

筆者が作品の説明を求めたことに対しUさんは,「木は，何となく何か核になるような感じ。核というのは，何かとはイメージしていなかったんだけど・・・。その周りに家庭があって，花がある楽しい家庭。まぁ，ご飯食べていけたらいいな，この先も。山は，登るっていうイメージだから，これからも頑張ろうとか，飛行船もそんな感じ。最後は，じいちゃん・ばあちゃんになって，ゆっくりと暮らしていきたいなということで，一番前にあります」と話した。また筆者が,「こちらで用意した写真の中で，自分にフィットしなかったものはなかった？」と問いかけたところ,「荒れた風景とか，孤独なイメージ，何となくだけど，それを入れたらそんな感じになるかなと思って，それは今いらないと思った」と述べている。

Uさんは,中央に“心の核”に相当する写真を配置した。しかもその核は緑の葉が生い茂る木であり，彼女の心理状態が安定していることを推察させる。また過去を示すといわれる左側に，自分が子供時代に求めていたが手にすることのできなかった「ほのぼのとした会話のある家族」の様子，穏やかな色合いをした花の鉢植えを配している。さらに，内面性を示すといわれる下方向には，やはり彼女が「ちっちゃい時は，友達のなんか見て，やっぱりいいなあって思ってたよ」と述べる色彩豊なお弁当箱を貼り出した。筆者らは，これもUさんにとって憧れであった温かな家庭の投影ではないかと捉えている。

一方，未来や社会性を示す領域といわれる右側に，青

図２「私のコラージュ」

空の下でそびえる錐だった険しい山を貼り出している。また，その上には大きな飛行船を配している。これについて筆者らは，Ｕさんが「これからの自分」と述べたことを踏まえ，決して甘くはない現実社会を承知した上で，自分のこれからをポジティブに決意している様子を感じている。また，内面に潜む未来への思いを示す右下に，穏やかに微笑む老夫婦を貼り出している。Ｕさん自身が述べるように「ゆったりとした老後」を望んでいるあらわれであり，現在そのようなイメージができるだけのゆとりや，気持ちの温かさを有していることが窺われる。

③「私へのお手紙」について

Ｕさんの「私へのお手紙」を，表３において示した。

表３　Ｕさんによる「私へのお手紙」

小学校５年生の頃の私へ

あなたは今不登校の真っ只中にいるね。家はアル中（アルコール中毒＝筆者ら補足）の祖父が家庭に君臨し，祖母は常に何かにイライラしている。そんな２人の周りでひっそりと暮らしている他の家族。そんな家だったね。

ある平日の昼間，あなたはいつもの様に家にいると祖母と口論になり『そんなにこの家が嫌なら家にいず，学校にいっているはずだ。そうしないのはお前がただの怠け者だからだろう。』と言われたことがあった。強い自己嫌悪に陥りあなたは自分の腕を刃物で傷つけた。ぐちゃぐちゃで，どうしょうもない感情。自分は大人になっても親のすねをかじり続け社会に出れず，恥ずかしい大人になるのではと怖かった。

でも，大丈夫。あなたは歩いてゆけるよ。歩みは少しずつだけれど時に歩けなくなるけれど，周囲の人に助けられ自分の力でまた歩き出す。あなたの足はちゃんと動くんだ。

子供の頃，学校に行けなくて学べなかったことは（勉強もだけれど，特に人との関わり方）本当にもったいなかったと思う。でもね。今の私は不登校児だった事は消し去りたい過去ではないんだよ。

あのときの自分は今の自分の一部になっている。今の私は自分のことが大好き。そう・・・思える日が来たよ。

だから大丈夫。あなたは大丈夫だよ・・・。

26歳の私より

筆者らは，この手紙からＵさんが「学習された無力感と劣等感」（稲垣，2000）を有していたことを感じている。すなわち，小学生であったＵさんに１人で生きてい

く術はなく，それ故に決して平穏とは言えない家庭環境の中で刹那的な心境に陥り，自己の殻に閉じこもり，自分を心理的にも肉体的にも傷つけるほか感情のやり場がなかったことを推察している。また，未来への時間的展望がつかめないことを発端とする不安感と絶望感，またアイデンティティの拡散にも似た状況にいたことも感じ取れる。

子ども達は，時間的展望が希薄な故に今の問題状況が永遠に続くのではないかという不安を強めてしまうことが指摘されている（犬塚・稲垣，1994）。また，そのような状況が長引くほど，子ども達は前述の無力感と劣等感を強化すると共に，橋渡・別府（2003）が述べる「自分への信頼感」を希薄にするという悪循環を来たすのではないかと考えられよう。筆者らは，ＳＲ当時のＵさんがそのような心理状況にあったのではないかと推察している。

しかし，この「お手紙」を書いた時点でのＵさんは，自身が「今の私は不登校児だった事は消し去りたい過去ではないんだよ。あのときの自分は今の自分の一部になっている。今の私は自分のことが大好き」と書いているように，自分の過去を見つめ直しポジテイブな時間的展望をもてるようになっている。これは，大嶋（2005）が述べる「不登校経験を将来の目標の中に取り込むことは，自分の不登校に人生の中で重要な意味を与えることを可能にするひとつの手段となっているといえる。そして，その意味が不登校のマイナス性を排除するものに過ぎないものであっても，彼らのその後の経過にとって再度の不適応への阻止力，指針となり，プラスの影響を与えるものとなりうると考えられる」という考察を支持している。

④「子ども達へのお手紙」について

以下に，Ｕさんが子ども達へ宛てた手紙を表４であげる。

表４　Ｕさんの「子供達へのお手紙」

子供達（Ａ・女の子７才）（Ｓ・男の子２才）へ

毎日一緒にいる２人に手紙を書くのは何だか照れますね。

Ａちゃんが生まれた時，パパ・ママはまだ学生で子供が子供を授かった様なものでしたね。病院で看護師さんに『Ａちゃんのお母さん』と呼ばれると違和感を覚えたものでした。それから数年，Ｓ君が生まれ４人家族に。甘えん坊のＡちゃん，気の強いＳ君。２人はどんな風に大きくなってゆくのでしょう。

Ａちゃんが今年小学校に入学する時，ママは嬉しさよりも不安な気持ちが先に来てしまいました。ママは小学校の頃いじめを受けていた期間があり（原因は他にもあったのだけど）不登校になりました。小学校２年生の時から中学卒業まででした。私とＡちゃんを重ねると，来年は不登校になっています。もしも２人がこの先不登校になった時，今度は親の立場で不登校とどう向い合えば良いのかな？

答えはまだ出ないけれど１つだけはっきりしています。それは・・・２人が不登校に・・・いいえ，どんな道を選んだとしても私たちにとって大切な唯，一つの存在であるという事。２人が確かにそれを感じられる様に照れずに伝えてゆきたい。

最後に・・・手間のかかるあなた達だけれど，それでいいんだよ。もっと手間をかけさせてください。２人が手を離れた時,『手のかからない良い子だった。』より『あんた達は手がかかって大変だったんだからねー。』と笑って言いたい気がするのです。不思議だね。

もっともっと大きくなってね。

ママより。

上述の「子供達へのお手紙」を読むと，一読してＵさんの子供達への慈しみの気持ちが感じとれる。その一方で，この「お手紙」ではＵさんのＳＲ当時を振り返っての自己開示が強く示されている。加えて，子供達を介しての未来へのポジティブな時間的展望が窺われる。稲垣・安西（2005）は，非行少年の立ち直りに関する調査において，彼らが新たな命，またその尊厳を実感したときに立ち直りの意欲を持ったことを報告している。本研究におけるＵさんの記述にも同様の趣旨が認められる。すなわち,反社会的・非社会的な問題行動の別を問わず,そこからの脱却に命の尊さを実感する機会が提供されることは意義があると考えられよう。

ところでＵさんは,この「お手紙」を書き終えた後,「子供は，やはり一番に他人の気持ちも，自分の気持ちも大切に出来るような人になって欲しい。社会的に安定したことではなくても，まともな人間に育って欲しいと思っている。＜中略＞自分が寄り道ばかりしてきたから，こうあらなければならないとか，こうあって欲しいとか，いろいろなことは思っていないけれど，幸せであり続けて欲しいと願っている」,また「だから,子供達が親にちゃんと愛されていると実感できるように“愛しているよ”と伝えたい」と述べている。さらに,「自分の子供の頃の家族は＜中略＞，母親がいない時期があったから，それは今出来ているし，自分は小さい時に押さえつけられることが多かったし，自分の気持ちも子供は黙っているという感じの家だったから，それが不満だった。自分の家庭は,そうしたくなかったので,のびのびとしていきたい」と語り，穏やかでいられている心理状況を感じさせた。

４．全体的考察と今後の課題

筆者らは，これまでＳＲ生徒への効果的なサポート

(支援)の有り方と具体的な方法について示唆を得ることを目的に，継続した調査研究を行っている(稲垣・松井，2007a，b,．松井・稲垣，2008)。本研究は，その継続研究として不登校経験を有する成人を対象に，①「私の人生曲線」，②「私のコラージュ」，③「私へのお手紙」，④「子供達へのお手紙」を実施した。以下，Uさんの自己への振り返りを時間的展望の視点で捉えていく。

人生曲線を見ると，５歳までの軌跡が下降している。その背景として，家庭の中で祖父が独裁的に君臨していたことが考えられる。Rogers（1965）は，教師が子どもに最低限してはならないこととして「圧力を加え続けて関わること」を指摘している。また，その理由として彼は「圧力を加え続けられると，子どもは緊張状態を強いられストレスフルな状態になる。そのため，その場を何とかやり過ごそうとごまかしの方法を学んでいく」と述べている。筆者らは，この知見が家庭においても当てはまると考えている。すなわち，君臨する祖父を前にUさんは，偽適応（仮性適応）の状態であったことが推察される。したがって，その状況下において彼女を支えてくれていた母親が家を出ると，心の拠り所を失いUさんの人生曲線は一気に下降する。また，Uさんが８歳のとき母親が家に戻ると，人生曲線は急激に上昇するが，彼女はSRの状態に入っていく。このことについて筆者らは，家庭内が必ずしも明るいとはいえなかった状況の中で，心の糸を張り詰めていて頑張っていた彼女に拠り所が戻り，心理的な退行現象があらわれたのではないかと考えている。しかも，その時期は兄へのいじめが彼女に飛び火する，また彼女自身が肺炎で入院するなど，SRに至る要因が重なったことも誘引として考えられよう。

ところで，SR状態のUさんはその時期を「不完全燃焼の日々・・・」と表現している。そして，高校入学と同時に登校できるようになる。それに伴うかのように人生曲線も上昇する。このことから，SRの状態にあってもUさんは，対人関係を求めていたことが推察される。この時期，彼女は県立の適応指導教室に通級する経験をしている。そして，それについてUさんは，同じ境遇の仲間と認知する出会いがあり，「そこ（＝適応指導教室）に行ったら，自分の居場所があるなと感じた」と述べている。筆者らは，このことについてSR児童・生徒にとって適応指導教室が“心の居場所”として機能すること，そこでの仲間が再登校を含む社会への参入の糸口になる一種の“ピア（Peer）”として機能する可能性があると考えている。

なお，短大に入学後の人生曲線は一時期下降するものの（＋）領域で移動している。これには，彼女にとって将来を共にすることになる男性との出会い，妊娠・結婚また出産，介護職という自己実現に向けた歩みが始まったことが背景として考えられよう。換言すれば，この時期はUさんにとって未来へのポジティブな時間的展望が実感として見えてきたのではないかと推察される。加えて，筆者らが注目しているのは彼女の「子ども達へのお手紙」における「最後に・・・手間のかかるあなた達だけれど，それでいいんだよ。もっと手間をかけさせてください。２人が手を離れた時，「手のかからない良い子だった。」より「あんた達は手がかかって大変だったんだからねー。」と笑って言いたい気がするのです。不思議だね」の文言である。ここには，将来の苦労をポジティブに，しかも期待を込めて待ち受ける彼女の力強さが読み取れる。

繰り返しになるが，UさんのSRとなった原因には複数の事柄が重なりあっていた。したがって，彼女にとってのSRの原因を１つに焦点化することは不可能であろう。そして，それでもＵさんのＳＲ全体に通ずる要因を推察するならば，稲垣（2000）が強度な自己及び他者否定感情を意味して述べる「歪められた感情（Distorted emotion）」がその中核にあったと考えられる。そうであるならば，我々のSRに対する視点として原因追及よりも“そのような彼らに何をしていくのか”が重要になると思われる。筆者らは，UさんのSR脱却へのサポートが①信頼できる他者（損得勘定・利害関係のない存在）との出会い，②ポジティブな時間的展望と自己実現への夢を提供できる人的・物的環境，であったと考えている。今後，これまで以上に不登校サポートを担う“存在”への上述を踏まえた質の向上，すなわち①児童生徒を自己一致した態度で受容・共感できる資質の向上，②目標（行動療法的な表現をするならば，“標的行動”）を設定し，現状から目標までのプロセスを具体的に想定して実践していく資質の向上，を促す研修，仲間との出会いを含む教育環境の整備と提供が求められよう。それにより，SR児童・生徒に自己存在感を与えることが可能になるのではないかと思われる。

＜文　献＞

明里康弘（2007）ラウンドテーブル　不登校．日本教育カウンセリング学会第５回研究発表大会発表論文集．208

橋渡和明・別府哲（2003）不登校生徒の信頼感に冠する研究．岐阜大学教育学部件報告　人文科学．52（１）．１-12

星野仁彦・熊代永（1990）登校拒否児の治療と教育．日本文化化学社

星野仁彦・大島典子・桃井真帆（2003）不登校の社会適応予後に関する調査研究．小児の精神と神経．43(2)．121-130

稲垣応顕（1996）いじめられ登校拒否傾向に陥った女子中学生への感情表出トレーニング適用事例の検討．新潟中央短期大学　暁星論叢．39．25-41

稲垣応顕（2000）学校教育相談における感情表出トレーニング適用の研究―その意義と課題―．10．11-22

稲垣応顕・安西佐織（2005）非行についての意識の違いに関する調査研究．富山大学教育実践総合センター紀要．６．143-155
稲垣応顕・松井理納（2007a）不登校経験者の自己省察に関する研究（１）―自己の変容と周囲への意識に着目して―．日本学校教育相談学会新潟県支部　スクールカウンセリング越佐．10．1-6
稲垣応顕・松井理納（2007b）不登校経験者の過去への振り返りに関する研究（１）―人生曲線と私へのお手紙を通して―．日本カウンセリング学会第40回大会発表論文集．171
犬塚文雄・稲垣応顕（1994）登校拒否生徒の心理特性に関する―研究―感情表出トレーニング適用事例を通してー．上越教育大学研究紀要．14（１）．67-80
松井理納・稲垣応顕（2006a）不登校サポーターの実態と意識に関する研究．富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要．１．65-75
松井理納・稲垣応顕（2006b）不登校サポートに対する意識と実態に関する研究―不登校経験者と非経験者の比較から―．日本教育カウンセリング学会第４回研究発表大会発表論文集．49-50
松井理納・稲垣応顕（2007）不登校経験者の過去への振り返りに関する研究（２）―人生曲線と私へのお手紙を通して―．日本カウンセリング学会第40回大会発表論文集．165
松井理納・稲垣応顕（2008）不登校経験者の自己省察に関する研究（２）．富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要．２．95-101
大嶋由紀（2005）不登校経験者が捉える不登校経験の意味．平成１６年度名古屋大学大学院修士論文
文部科学省（2006）生徒指導の諸問題の現状と課題―平成17年度版―．財務省印刷局
文部科学省（2007）生徒指導の諸問題の現状と課題―平成18年度版―．財務省印刷局
文部科学省（2007）「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」．文部科学省ホームページ（http：//www．Mext．Go．jp/b_menu/houdou/20/08/08073006/001．pdf）
森田洋司（2001）不登校に関する実態調査（平成５年度不登校生徒追跡調査報告書）．文部科学省ホームページ（http：//www．mext．go．jp/b_menu/houdou/index．htm）
森田洋司（2003）不登校―その後．不登校経験者が語る心理と行動の軌跡．教育開発研究所
Rogers．C（1965）Counseling and Education．／畠瀬稔　編訳（1993）教育とカウンセリング．岩崎学術出版社
相馬誠一（2006）不登校の現状と課題．月刊生徒指導．11．学事出版．6-11
相馬誠一（2007）シリーズ　こころとからだの処方箋13／上里一郎　監修　不登校―学校に背を向ける子どもたち．ゆまに書房

（2008年９月１日受付）
（2008年11月５日受理）